

榛名山東南麓の千葉氏伝承

—— 寺社縁起を中心に ——

〔キーワード ①千葉氏 ②船尾山 ③花園妙見 ④修験〕

はじめに

群馬県の榛名山東南麓の地には、平安から鎌倉期にかけての千葉氏の武将や、その先祖平良文・平将門らにまつわる伝承が多く残されている。千葉氏が勢力を持っていたのは上総・下総の両総地域であったにも関わらず、近世には上州の寺社縁起や地名の由来に登場し、上野国総社の辺りに居住していたという説まで生じるに至る。これらの伝承の中で二大伝説ともいえる話は、榛名山系の東端の「船尾山」と呼ばれる山にあった大寺院が千葉氏の軍勢によって炎上した話（船尾山に関する伝承）と、同じく榛名山系の相馬嶽を仰ぎ見る国府の地にあった妙見院息災寺に千葉氏が深く関わっていた話（花園妙見の伝承）である。

先行研究では、船尾山の縁起の登場人物に千葉常将が設定された理由として、妙見信仰を奉じた修験者とその拠点となった

青木 祐子

花園妙見社が関係していたことが推測されている^{注1}。船尾山の縁起の諸伝本や所蔵者についても詳細な報告がなされ、縁起の管理や作成の背景が明らかになりつつある^{注2}。

船尾山炎上の経緯を語る伝承は、群馬県榛東村の船尾山^{りゅうび}柳沢寺^{りゅうさき}の縁起のほかにも存在する。その中で、特に千葉氏の妙見信仰が関わっているものとしては、高崎市引間の花園妙見の縁起や、高崎市箕郷町の大嶽山滝沢寺^{りゅうさき}の縁起が挙げられる。これらのテキストにおいて、船尾山をめぐる千葉氏の妙見伝承がどのように書き表されているかという観点からは、まだ充分に考究がなされていない。

本稿では先学の成果を踏まえ、各縁起の内容を比較検討することで、各寺院が千葉氏の伝承をどのように取り込んだのか考察してみたい。

一、船尾山柳沢寺の縁起

北群馬郡榛東村山子田字御堀にある船尾山柳沢寺は、千手観世音菩薩を本尊とする、天台宗の寺院である。地元では「やなぎさわじ」とも呼ばれている。中世には天台宗の談義所として著名な寺であった。^{注3}ここはかつて桃井郷と呼ばれた地域である。中世後期に関東天台の布教活動がさかんになると、柳沢寺が室町後期からこの地方の天台の教線拡張の中心寺院となった。^{注4}近世の寺領は朱印三十石で、世良田長楽寺の末寺であった。天保二年（一八三二）写で天正二年（一五七四）の本奥書を持つ『船尾山柳沢寺所伝ノ縁起』と、寛政五年（一七九三）写の『船尾山記并引』、天保七（一八三六）年写の『船尾山等覚院柳沢寺境内思河大吉祥弁財功德天女略縁記』を所蔵している。寺の東隣に千葉常将を祀った常将神社がある。

榛名山麓には「船尾記」や「船尾山由来記」等の名を持つ写本が二十本確認されている。この地で近世中期以降書写され、家々に伝わったものである。近藤義雄氏はこれらの伝本を第一類（十二段構成。地名伝説を多く取り入れ、再生譚の部分が詳しい）・第二类（六段構成。和歌や道行があり美文。浄瑠璃の台本的）・第三類（この地方の祠堂や社寺の縁起）に分類している。^{注5}柳沢寺が蔵する船尾山の縁起はこの第三類にあたる。

次に各伝本にはほぼ共通する梗概を記す。東国巡教中の伝教大師最澄に群馬の太輔満行が帰依して、榛名山の船尾滝の近くに大伽藍を建立した。千手観音を本尊とし、寺は繁栄した。下総

の千葉常将は嫡子がいないことを嘆き、子授けの祈願のために夫婦でこの観音に参詣して男子を授かった。相満と名付けられた若君は、十歳の時に船尾山の稚児になったが、十七歳の時に山王の祭りで天狗に攫われてしまった。常将は軍勢を率いて船尾山へ行き、誤解から寺の衆徒と合戦になり、寺を焼き払ってしまった。すると焼け跡に天狗が相満を連れて現れ、雲上から事の次第を告げた。常将は寺を焼いてしまったことを悔いて自害し、郎党もその後を追った。常将の妻はこの悲報を聞き、下総からはるばる船尾山にのぼり、夫や一族を弔うために一寺を建立した。その後、妻も自害し、弁財天女として祀られた。以上が船尾山の縁起にほぼ共通する内容で、寺院草創の由来、合戦による焼亡、寺の再建という構成になっている。

この船尾山の縁起に類似した話が、十四世紀中頃までに成立の『神道集』に収録されている。寺院建立と炎上後の再興という点から両者の相違を見ると、次のようになる。「船尾記」の諸伝本の書写年代・内容については、榎本千賀氏の論考を参照した。^{注6}

※『神道集』巻第八―四十七話「上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」^{注7}

群馬郡桃井郷の田烈藤次家保が船尾山に船尾寺と石巖寺を建立する。寺を焼失させた者は上野国司の桃苑左大将家光。その子息である稚児の名は月塞。

↓寺院炎上後、稚児の一族が神とあらわれ、後に麓の津祢の宮に祀られた。

※船尾山の縁起

群馬の国府に住んでいた群馬太輔満行が伝教大師のために寺院（伝本によつて寺院名が異なる）を建立する。寺を焼失させた者は、桓武天皇の後胤平忠常の子、千葉常将（または常政）。稚児の名は相満。

○『船尾山柳沢寺所伝ノ縁起』^{注8}

船尾山中に独鈷山妙見院息災寺を建立。

↓寺院炎上後、常将の妻子が楊沢寺を建立。

↓寺の名前を柳沢寺に変えて現在の位置（山子田村）に移った。

○第一類本「船尾記」

国府に独鈷山妙見院息災寺を建立した後、船尾山中に船尾山東学院楊沢寺を建立。

↓楊沢寺炎上後、常将の妻が麓に柳沢寺を建てた。

○第二類本「船尾記」

船尾山中に船尾山東学院柳沢寺を建立。^{りゅうせき}

↓炎上後、山号院号はそのままで寺号を柳沢寺と改めた。^{やなぎさわ}

第二類本には息災寺の名がみられない。他の船尾山の縁起では、寺を建てた場所が船尾山と国府という違いはあれど、最初に建立された寺院の名が「独鈷山妙見院息災寺」である。現在、高崎市引間町に「三鈷山吉祥院妙見寺」という寺院があり、これが「息災寺」の後身だと言われている。さらに、千葉氏の守護神である妙見大菩薩はこの寺から勧請されたとされている。

船尾山の縁起に息災寺の名が出てくると、主要登場人物に

千葉氏が設定されたことは無関係ではないだろう。

千葉氏の伝承や系図類において、常将は千葉氏の祖とされる人物である。その中に彼が上野国に関わったという記述は見られず、千葉氏が船尾山を焼いたという逸話は当地において創作された可能性が高い。ただし千葉氏の妙見伝承の一つに、常将が妙見の化身の天人と夫婦になり、常長が生まれたという羽衣伝承がある。^{注9}船尾山縁起において、常将の妻が自害した後には弁財天女（あるいは大悲天女）として柳沢寺境内に祀られたという部分は、この常将天人女房譚の影響を思わせる記述である。

船尾山の縁起は、『神道集』の「八箇権現事」や在地の伝承をもとに成り立つたと考えられているが、登場人物を千葉氏に設定することで、下総国と上野国を行き来するという規模の大きな話になっている。また、満行による寺院建立と千葉氏による炎上再興という、時代的にも民族的にも関連しない二つの話を、「妙見」と「千葉」というキーワードを入れることで繋げようとする意図が感じられる。

ここで注意すべきことは、千葉常将の一族は皆自害し、嫡子相満は天狗とともに去ったという結末である。千葉氏の伝承を利用しながらも、その千葉氏が亡んでしまうという矛盾した内容を孕んでいるところに、この伝承を作り上げ語った人々の、千葉妙見信仰に対する距離感があらわれている。

二、花園妙見の縁起

高崎市引間町字花園にある三鈷山吉祥院妙見寺は、妙見菩薩

を本尊とする、天台宗の寺院である。以下、主に『妙見寺誌』^{注10}を参照し、寺の沿革を記す。『続日本紀』の光仁天皇宝龜八年

(七七七)八月十五日条に、河内国の妙見寺に上野国群馬郡から五十畑の封戸を出したという記事がある。この封戸施人が契機となつて、上野国にも妙見寺が建立されたと推測されている。

十世紀後半成立の『僧妙達蘇生注記』には上野国の「妙見寺」の名がみえる。昭和十年(一九三五)、隣の字である東国分から応永十七年(一四一〇)銘の梵鐘が出土した。銘文には「上野忍群馬郡府中妙見寺」とあり、上野国守護代長尾憲明が寄進した旨が刻まれていた。現在の妙見寺境内には応永三年(一三九六)在銘の台座や、室町期と推定される宝塔や石殿がある。

室町期に妙見寺は総社長尾氏の外護を受けたが、その後長尾氏の没落に伴って、衰微したようである。寛永二年(一六二五)に僧亮瞬によつて中興され、徳川家光に十八石五斗の朱印を与えられた。その後、明和年間(一七六四～七二)、文化四年(一八〇七)、翌五年、文政元年(一八一八)と、度重なる火災に見舞われた。現在の本殿は天保十四年(一八四三)に再建されたものである。

鎌倉末から南北朝初期の成立とされる『源平鬪諍録』や、室町中期頃に千葉妙見の別当尊光院で制作された『千学集』(遺失)を江戸期に抜書したという『千学集抜粹』など、千葉氏に関係するところで作られた伝承資料においては、下総千葉氏が守護神として勧請した妙見大菩薩は、上州群馬郡花園の里の七星山息災寺に鎮座していたものとされている。永仁六

年(一二九八)の書写奥書を持つ『上野国神名帳』の群馬西部の部には「従三位息災寺小祝明神」とあり、近世にはこの息災寺が妙見寺に当たると考えられていた。^{注11}

花園妙見の縁起には、国府郷土誌本『萩花園星神記』(明治三年写)、大山好弘氏蔵『萩花園星神記』(書写年代不明)と『花園星神記』(明治十四年写)、近年大島由紀夫氏によつて翻刻・紹介された東京都台東区の長国寺蔵『上毛花園星神記』(近世後期写)がある。^{注12}長国寺蔵本は、和田山村(現・高崎市箕郷町和田山)の松本兵右衛門平常正が千葉妙見寺に奉納したものである。^{注13}末尾に、橘豊村による染谷川の記事を万葉仮名で詠じた長歌を載せる。

『妙見寺誌』によれば、妙見の縁起は近世初期の妙見寺再興後に作成されたもので、作成に際して各地の妙見縁起類をもとにしたともいわれている。確かに、現在伝わる諸本は、享祿元年(一五二八)・天文十九年(一五五〇)成立の『千葉妙見大縁起絵巻』(千葉市榮福寺蔵)や、寛文二年(一六六二)成立の『下総国千葉郷妙見寺大縁起』(相馬市歓喜寺蔵)と共通する内容を多く含んでいる。

以下、千葉氏の妙見伝承と比較するため、『上毛花園星神縁記』の内容をAからJに分けた。

A 元正天皇の御宇、管領上野大掾藤原忠明卿が、花園村の乾に当たる小祝の池に北斗七星が天から降つたのを見る。池を浚わせると霊亀が見つかったので、萩の花園に祠を作つてそこに置いた。その後朝廷に献上し、年号が和銅から霊亀に改

元された。再び忠明卿は関東下向の勅命を蒙り、霊亀を元の池に納めた。

B 聖武天皇天平元年（七二九）三月二十二日の夜半、小祝の池が鳴動し、亀は光り輝きながら天に昇り、北斗七星に入った。このことが都へ伝えられ、占いの結果、妙見社が建立され、七星山息災寺と号した。また国分寺も建立された。本尊は七仏薬師如来である。

C 承平二年（九三二）桓武天皇の曾孫、鎮守府將軍村岡陸奥守平良文が勅命を受け、常陸大掾国香を征伐すべく、上野国群馬郡の染谷川で対戦した。良文は妙見菩薩の加護により勝利した。妙見は星の神の化身であると名乗った。

D 良文は星の宮を里人に尋ね、相馬小次郎将門、村岡小五郎資通、陸奥権介忠頼、鎌倉中将忠光、上野介良時、粟飯原文次郎常時等の七騎で向かい、七番の小笠懸を射て奉った。良文の家臣、粟飯原文次郎は山伏姿となって息災寺に留まり、謀を以って妙見尊像一体を持ち出し、上野国平井で一宿した後、良文の領地である武蔵国藤田に社を立てて神楽を奉納した。その後、鎌倉の村岡に寺を建立して妙見尊を安置し、平家千葉の守護神として祀った。

E 良文の母が北斗七星に祈ると、七星の化身の童子が現れ、良文を授けた。それゆえ良文は北斗の神の守護を受けた。

F 武蔵国秩父の妙見は、良文の四代孫秩父三郎武基（忠常の甥）が勧請した処である。武基の父将常は兄忠常の謀叛に与して討死し、武基は佐渡に流され亡くなった。武基の嫡子武

綱は本領を召し上げられて蟄居していたが、妙見に祈請し、満願の夜に霊夢を見た。その霊夢に従い、源義家の先陣を務めて、武衡家衡の反逆を征伐した。その功によって秩父の庄を賜り、従五位下伊予守に任ぜられた。

G 上総の仁見・植野・大椎・下総の大夫・千葉郷の妙見も、すべて上野国花園妙見社を移し奉ったものである。その内で千葉の妙見尊は、千葉介平常重が勧請したもので、数度の合戦で御利益を被った。

H 中でも源頼朝が安房国に逃れたとき、千葉介常胤と嫡子胤正は一族郎党率いて馳せ向かった。しかし遅れて出立しようとした嫡孫成胤を千田判官親政が襲った。多勢に無勢のところを、成胤は妙見に祈ることで勝利することができた。これを聞いた頼朝は大いに感じて妙見社に参詣した。

I 堀川院の寛治七年（一〇九三）、下総の千葉常将の二男相満丸が、学問の為に上野国船尾山に登ったが、行方不明になった。寺の仕業であると恨んだ常将は兵を率いて馳せ登り、一山を焼き滅ぼした。この時、息災寺妙見社等が類焼した。霊像は白雲に乗って天に帰った。

J 天平より寛治まで、三百六十余年を経た諸堂玉殿は常将の怒りによって灰燼となった。常将の嫡子常長は父の過ちを悔い、その昔忠明卿が霊亀を籠め置いた萩の花園の跡に妙見堂を再造営した。往古の広大な寺の跡は今も残っていて、大きな履石や焼崩れた布目瓦が残されている。

Aの小祝明神にまつわる部分は、『続日本紀』巻第六・元正天皇和銅八年八月二十八日条、靈龜が献上されたことにより年号を靈龜に改元した記事をもとに、地元の小祝明神に関連付けて作られた伝承である。

Bは、妙見を祀る七星山息災寺の建立後に、千葉氏の伝承には無い国分寺建立を語っている。現在、妙見寺の北東二百メートル程のところに上野国分寺跡がある。本尊に関しては、「七尊妙見の社堂」の次に割注で「本地七仏薬師如来」とあり、西天の波羅門僧正の請来、毘首羯磨の作とある。『千葉妙見大縁起絵巻』では、七星山息災寺は聖武天皇の勅願所で行基の建立、本尊は七体の妙見大菩薩であり、或る説には美珠香都磨の作という^{注16}と語られている。妙見の本地は、『源平闘諍録』巻五―三では十一面観音であったが、室町中期頃になると七仏薬師に変わっていったようである。

C・D・E・Gは、『千葉妙見大縁起絵巻』や『下総国千葉郷妙見寺大縁起』の染谷川合戦に妙見が示現して瀨踏した事、敵に剣の雨を降した事、良文が粟飯原文次郎に命じて御神体を息災寺から密かに持ち出させ、遷座させていった事を語る部分に当たる。『源平闘諍録』巻五―三には、平将門と平良兼が承平七年（九三七）に蚤飼河を挟んで戦ったときに、将門を上野花園の妙見が助けたとある。上野国の染谷川を挟んで良文と国香が合戦したという話は史実ではないが、中世末から近世の千葉氏関係の書物（『千葉実録』『千葉伝考記』『総葉概録』『白井家譜』『大須賀・君島系図』『千学集抄』等）に散見する伝承で

ある。

Hの部分も、千葉妙見の絵巻の頼朝公が安房に渡った事、結城浜の合戦で千葉成胤が妙見の加護を得て千田判官親政を打ち破った事、それを聞いた頼朝公が妙見堂に参詣した事を下敷き^{注16}にしている。

このように大まかな内容は共通しているが、細かい違いも多くある。千葉妙見の絵巻は将門の謀叛の事をまず語り、染谷川の合戦では将門と良文が並んで活躍し、妙見の加護を失った将門がのちに藤原秀郷に亡ぼされてしまうという逸話を語る。それに対してDの部分では、将門について、妙見社を探す七騎のうち「相馬小次郎将門」と名が挙がるのみである。花園妙見の縁起では、将門に関する部分を故意に削ったふしがある。

また、良文を助け、粟飯原文次郎常時が息災寺から持ち出した妙見は、『千葉妙見大縁起絵巻』では「羊の妙見大菩薩」だったとある。「羊の妙見」という言い方は、千葉氏の妙見伝承において見られる言い方であり、『上毛花園星神縁記』や『萩花園星神記』など上野側の資料には確認できない。しかし「息災寺小祝明神」に関しては、渡来系の羊氏が氏寺として建立したという説がある^{注16}。また、上野国には羊氏にまつわる様々な伝承があり、なかでも羊太夫の伝承は有名である。この伝承が千葉氏の妙見伝承に影響を与えた可能性も考えられる。花園妙見の縁起で「羊」の要素が削除された理由は、当時の妙見寺の状況と、千葉氏の妙見伝承との間にずれがあったからかもしれない。同様に、『千葉妙見大縁起絵巻』所載の息災寺の地形や境内

の様子、東覚山国分寺という薬師堂、藤原秀光卿夫婦の石像、小祝神の本地と靈験（焼けた時に木像が飛び出て片方の面を焦がした）、国分寺惣社、妙見の前立、数江兵衛次郎入道が別当坊を建立したこと、妙見の乳母の神と尿沢の話、^{注19}別当丹後公と證円坊の話、息災寺に残された六体の妙見の話など、在地の情報を元にしたと考えられる話が、花園妙見の縁起には書かれていない。

Fの部分は秩父氏の伝承を語っている。千葉妙見の絵巻では良文が妙見大菩薩を武蔵国藤田から秩父に移したと簡略に記されているのに対し、花園妙見の縁起では良文四代の孫である秩父三郎武基が花園妙見社から秩父に妙見を勧請した事や、後三年の役に秩父武綱が加わったという逸話が詳しく語られている。『上毛花園星神縁記』は、栗飯原文次郎が妙見尊像を運んだ経路を、息災寺―平井の芝崎―武蔵国藤田―鎌倉の村岡の順にしており、秩父妙見について別項を立てて詳しく述べようとする意識が確認できる。

秩父武綱が源義家の先陣をつとめたという話は、『平家物語』延慶本巻二末・長門本巻一一、『源平盛衰記』巻二三にみえる。『源平闘諍録』卷一之上は、武綱の子重綱が先陣をつとめたとしている。このように秩父氏と八幡太郎義家の結び付きが軍記類に記される一方で、花園妙見の縁起で語られるような秩父妙見の靈夢（『上毛花園星神縁記』は「白夢の老人」、萩花園星神記『花園星神記』は「怪しき童子」が現れて武綱にお告げをした）は、千葉氏の妙見伝承中には確認できていない。『千

学集抜粹』には、忠頼から始まり畠山重康まで至る秩父氏の代々についての記事があるが、ただ系譜を述べるのみで、秩父妙見の靈夢譚は書かれていない。

IとJは船尾山縁起に係わる部分である。船尾山炎上の経緯を語り、息災寺が類焼してしまったとある。息災寺と船尾山の繋がりは、船尾山の縁起の草創譚に息災寺の名がみえたことからも窺える。さらに『萩花園星神記』では、良文と国香の合戦の規模が染谷川周辺から船尾山・安蘇山（相馬山）などへ広がり、船尾山の衆徒が良文に加勢するという話まで添加されている。船尾山関係の話は千葉氏の妙見伝承には全く存在しない記述である。

常将の子息相満に注目すると、船尾山縁起では神仏に祈願してやっとなつた一人子という設定であつたが、花園妙見の縁起では次男という設定になつている。そもそも船尾山の縁起では、『柳沢寺所伝ノ縁起』を除いて、千葉常将一族が皆自害してしまつて子孫を残さない。千葉氏の妙見信仰と深い繋がりを持つ花園妙見社において、そのような結末が許されるはずがなく、常将の嫡子常長を登場させ、息災寺を再興させている。船尾山縁起を意図的に改変したか、もしくは「千葉氏が寺を焼いた」という伝承が生じた際に、それを柳沢寺側では「八箇権現事」のような一族が滅んだという話にしたのに対し、妙見社側では嫡子常長が再興するという話にした可能性も考えられる。

花園妙見にまつわる縁起には、染谷川合戦の妙見靈験譚とは別の妙見縁起を採用したものもある。安永三年（一七七四）刊

の元総社村釈迦尊寺の泰亮愚海著『上毛伝説雜記』巻之九「上野伝説下」には、「花園妙見略縁起」が載っている。この縁起の前半は百済の琳聖太子が北辰妙見尊星を日本に伝えたという大内氏の妙見信仰に関する内容であり、後半は千葉常胤が花園邑に七星山息災寺を建立して北辰妙見尊星を安置したという内容である。同書には千葉氏が上野国総社のあたりに住み、息災寺や国分寺を再興したという話も収録されており、この伝承をもとにした略縁起だと考えられる。

また、近世後期写の『上野国群馬郡引間村妙見社縁由書』（群馬大学図書館蔵）には、次のようにある。上古に妙見山国分寺息災院（行基菩薩が落慶の導師）と呼ばれた寺が火災で荒廢した。中古は北斗山妙見院嶮山寺と号したが、賊火の為に灰燼となる。その後現在の地に移って三鉢山吉祥院妙見寺と号した。

しかし不慮の災難で堂宇残らず亡び、妙見尊の真体を失った後、焼石の中から萩が生え、それに新浄の荒薦を被せて堂宇を建立し内陣に秘封した。そして天文の頃、惣社に居城のあった秋元兵部大輔某が再興したという内容である。本文中に「亦榛名山并船尾山の縁起等にも妙見の事粗載たれとも委しからず、古記曰、下総国千葉の妙見は当所妙見を勧請して草創せしより始る云云」^{注21}とあり、船尾山の縁起や千葉の妙見信仰を記したテキストを参考にしながらも、それらと異なる伝承をもとに妙見社の歴史を語ろうとする点に特色がある。

これらの縁起と比べて、『上毛花園星神縁記』『萩花園星神記』は、千葉氏の妙見伝承を大幅に取り入れた形で成り立っている。

さらに秩父氏の伝承も追加し、千葉氏の伝承を別途に受けて成り立たと考えられる船尾山縁起の逸話を再興譚として組み込んでいる。このような花園妙見の縁起が作り出された背景には、千葉氏の妙見伝承を上州の地に運んだ人たちと、現地でそれを受け入れ、利用した人たちの活動があったと考えられる。

三、大嶽山滝沢寺の縁起

船尾山炎上譚を草創譚に取り入れている寺院に、高崎市箕郷町白川の大嶽山検点院滝沢寺^{りゅうたくじ}がある。現在は曹洞宗であるが、古くは天台宗であったという。『箕郷町誌』に載る寺の縁起のなかから、船尾山炎上に関係する部分をまとめると、以下の通りである。^{注22}

昔は天台宗で慈覚大師円仁の開山、不入の滝がある地に満行山不入院滝沢寺があった。天喜四年（一〇五六）千葉左衛門常胤は、鎮守府將軍源頼義が奥州安部頼時を討伐する軍に従って、此地を過ぎたとき、常胤の一子相満を寺に修学のため預けた。その後、相満が行方知れずとなった。常胤は寺僧が隠したものと思い、火を放って一山を焼いたが見つからなかった。この時、僧某が不動の尊体を持つて難を逃れ、夢に靈感をみて一堂を結んだのが現在の滝沢寺だという。この縁起は当寺が所蔵する「滝沢寺記」によるものらしい。^{注23}

千葉常胤は源頼朝に仕えた武将であるから、源頼義が奥州の安部氏を討った前九年の役に従軍したということはありえない。滝沢寺の縁起で言う「常胤」は「常将」の誤りであると考えら

れる。この混同は、『上毛伝説雑記』等にみえる千葉常胤の伝承が、棟名山東南麓に深く根を下ろしていたことによるものであろうか。

学問のために相満を船尾山に預けたとするのは、船尾山の縁起や花園妙見の縁起と同様である。しかし、船尾山の縁起が相満を観音の申し子であるとするのに対し、滝沢寺の縁起は修学のきっかけに奥州征伐をもつてくることに特徴がある。

滝沢寺の縁起はこのほかに『上野国群馬郡大嶽山縁記』（高崎市東国分の本山派修験大蔵坊の所蔵）があり、榎本千賀氏による紹介・翻刻がある。同氏はその特色について、滝沢寺に伝わる縁起と異なる点が多く、縁起の前半は『辛科大明神縁起』（満行の息子八郎満胤にまつわる話）、後半は『船尾記』を融合し、新たに曹洞宗寺院永源寺による再建を付加した再生縁起であると考察している。^{注24}

以下、『上野国群馬郡大嶽山縁記』の船尾山炎上の記事の冒頭を引用する。榎本氏による翻刻をもとに、濁点と句読点を補い、傍線を付した。

爰ニ満行山滝沢寺、船尾山柳澤寺、北斗山水沢寺とて坂東一の霊場にして、是を則三寺と言。蓋傳教大師之開基なり。此外三千余坊有とかや。宝亀七年より寛治七年迄、三百七十年之間、諸塔軒をつらね。□数玉をみがき、霊げん日々あらたなれバ、繁昌月々ニ未來の快樂を成就せり。人王七十三堀川の院御宇、寛治三年、八幡太郎義家朝臣羽興征伐之砌、此三寺に於而軍勢を催し給ふ。先一ばんに馳參る

面々ニハ、秩父十郎武綱、三浦平太夫為道、同平太為次、鎌倉権五郎景政、常陸ニハ笠間押領使常遠、上野下野ニハ瀧名の面々、中ニも下総国住人千葉之助常政、嫡子ニハ四郎常長、次男相満丸を引具して参着せり。

滝沢寺所伝の縁起が前九年の役としてしているのに対し、ここでは後三年の役としている。奥州征伐の義家の軍勢中まず名前が挙げられた秩父十郎武綱は、『上毛花園星神縁記』のFの部分にも登場する人物である。そこでは武綱が妙見の霊夢のお告げにより、源義家の軍に加わったという逸話が語られていた。また点線部の表現は花園妙見の縁起と使用する語句の上で共通性がある。^{注25}『上野国群馬郡大嶽山縁記』の船尾山炎上譚は、『上毛花園星神縁記』のFとI・Jの内容を取り入れ、二つの話を結合して作られた可能性が考えられる。

藤原秀郷流の瀧名氏を除いて、秩父武綱、三浦為道、三浦為次、鎌倉景政、平常遠、千葉常政はすべて良文流平氏であり、『源平闘諍録』卷一之上―一や『千学集抜粹』などの、良文の子孫を説明する箇所が登場する名である。義家の軍勢として彼らの名を並べるところに、千葉氏伝承の影響が強く出ている。

この縁起では義家と常將の結び付きが強調されており、義家が常將に次男相満丸を船尾山柳沢寺に預けるように命じたところが、奥羽征伐後、常將は下総に帰り、相満丸を下山させるために使者を遣わすが、船尾山において天狗に奪われたと聞かされる。常將は北斗山（船尾山）にのぼり、一山を焼き亡ぼしてしまふ。そして常將の自害後、残された常長によって柳沢寺が再

建されるといふ展開になる。

『上毛花園星神縁記』では船尾山炎上によつて麓の花園妙見も類焼し、常将の嫡子常長が妙見社を再建するという話であった。『上野国群馬郡大嶽山縁記』でも同様に常長が寺を再建するのであるが、それに至るまでの話として夕顔観音の逸話が挿入されている。

その内容は以下の通りである。焼け跡に現れた相満が雲の上から、形見として夕顔の実を父常将に与えた。常将は自害する前に、その種を常長に渡した。常長が本国へ帰つてその種を植えると、大きな実がなつた。割つてみると、中から観世音菩薩が現れた。常長は下総国香取郡東庄五郷内村に常光寺を建立し、千葉家類世の守護の本尊夕顔観世音として奉じた。その後常長は、上州北斗山の麓桃井庄に父の菩提を弔うために柳沢寺を再建して、常将卿を常将大明神と祀つたとある。

この部分は千葉氏の妙見伝承である夕顔観音の話をもとにしてゐる。これは『妙見実録千集記』に「花見系図注28に云」として載る話である。妙見菩薩の変化である天人と千葉常将が夫婦になり、常長が生まれた。後に、天人は羽衣を着て天に帰つたが、常将臨終の時に影向し、常将を伴つて天上した。その時、常長は母から形見として夕顔の種を与えられた。種を植えると、大きな実がなり、割つた中から父母の御像が現れた。常将与母の天人は観世音菩薩として現れたという話である。この説話は千葉県香取郡小見川町五郷内にある樹林寺にも伝わつてゐる。この寺は花見系図の江戸期の写本を蔵し、貞享元年（一六八四）

の奥書を持つ『夕顔観音大菩薩縁記』も蔵してゐる。ただし後者の縁起は良文と忠頼親子の話になつてゐる。注28

船尾山炎上の発端となる稚児相満は、上野国において創作された架空の人物であると考えられるが、これは常将の子である常長が、天人から生まれたという伝承を持つていたことと無関係ではないように思える。常将やその子息には、神仏が関係した伝説が作られやすい素地があつたのではないだろうか。

滝沢寺の縁起は、奥州征伐に加つた坂東平氏の伝承が基底にある。そして『上野国群馬郡大嶽山縁記』は、常将与源義家の結び付きを強調するだけでなく、千葉氏の妙見伝承である夕顔観音の逸話を取り入れ、船尾山の縁起に合うように改変し、柳沢寺の再興譚に結び付けてゐる。さらに、義家の軍勢中最初に秩父武綱の名前が挙がつてゐることに對しては、秩父氏の伝承を詳しく語る『上毛花園星神縁記』の影響を受けてゐることが想定できる。

四、本山派修験大蔵坊について

『上野国群馬郡大嶽山縁記』を所蔵してゐた大蔵坊は、天台系寺門派聖護院本山派に属する修験である。所在は高崎市西国分で、花園の妙見社から北に九百メートル程の距離にある。

大蔵坊は室町期から江戸期にかけて群馬郡中部に多くの霞下（支配下）を持ち、中世後期には上野国における修験を統括する上野国年行事職を務めた。文安四年（一四四七）からの多数の文書を有してゐる。文明十八年（一四八六）に道興准后が諸

国を巡ったとき、大蔵坊に逗留したことが『廻国雜記』にみえる。^{注29}

また、前述の『上野国群馬郡大嶽山縁記』や『船尾山記』等の在地縁起資料を所蔵している。榎本氏は、近世以降に群馬県下の寺社や修験間で在地縁起資料の貸借が頻繁に行なわれ、特定の寺院や修験が縁起資料の管理をし、新しい縁起を作成していたという重要な指摘している。^{注30}つまり、柳沢寺の縁起・花園妙見の縁起・滝沢寺の縁起は、このような寺院・修験間の交渉の中において作り出されたものであったといえよう。

本稿では、各寺院がお互いの縁起を利用し合ったことを、縁起の内容の面からも確認できた。これらの寺院の縁起に見られる千葉氏の伝承は、大蔵坊を中心とする本山派修験から発信されたものだったのではないかと推測する。

村上春樹氏によれば、本山派修験の山伏は将門伝説の伝播に深く関わっており、中世には妙見信仰とも結び付いたという。^{注31}

また同氏は、相模国八菅山の修験集落は千葉や相馬という俗姓を持ち、妙見信仰と関わっていたこと、秩父の城峯山は将門伝説を持つ山で、群馬県内にも多数の城峯講が存在したこと、秩父には本山派修験が多く、将門の末裔を称する山本坊が取り仕切っていたこと、山本坊配下の東学院の墓地裏手に棟名神社が祀られ、上州の棟名修験と結ばれていたことを指摘している。棟名山系の相馬嶽は修験の行場として有名であった。

秩父の山本坊は十四世紀末からの活動が確認できる。大永八年（一五二八）以前から秩父六十六郷の熊野参詣先達職を所持

し、近世にはその他に越後国内、武蔵国入西郡、比企郡、常陸国内四カ郡まで支配地域（霞場）を広げていた。^{注32}

秩父から上野国は近く、修験山伏の交流も活発に行なわれていたようである。大蔵坊が別当をしていた熊野神社には「奉納秩父四番」と書かれ、延宝（一六七三〜八一）の年号の入った石宮がある。『国府村誌』によれば、武州秩父郡荒木村高谷山金昌寺の本尊（十一面観世音）を勧請したものだという。金昌寺のすぐ近くには七社権現社があり、秩父神社と関係していた。秩父神社は平安時代中期に妙見信仰が導入され、近世に至るまで「妙見社」「妙見宮」と称されていたところである。

これらのことから、棟名山と棟名山麓の修験が秩父の修験と交流した結果、将門伝説や、良文に始まる千葉氏や秩父氏の伝承が上州に伝わっていったことが想定できる。それによって、当地の修験と寺院の交流のなかで寺社縁起が作られ、在地に多様な千葉氏伝承が生まれていったのではないだろうか。柳沢寺・花園妙見・滝沢寺の各寺院も、本山派修験の坊とそれぞれ関わりを持っていた。

大蔵坊と柳沢寺の関係であるが、『上野国郡村誌』の西国分村の項にある「談義薬師趾 村南ニアリ、古昔舟尾山柳沢寺隆盛ノ時説法談義アリシ旧跡ナリト云伝フ」^{注33}という記述に注目したい。柳沢寺の説法談義を行なう場所が、山子田村の柳沢寺から直線距離で約六キロメートル程離れた西国分村の南にあったらしい。ここはむしろ妙見寺から近い場所である。なぜこのような離れた場所に柳沢寺の談義所があったのだろうか。

「寛永十二年西国分検地帳」には「やくし前」の小字がみえ、そこには熊野神社と別当大蔵坊がある。現在、熊野神社の百メートルほど東に小さな薬師堂がある。薬師坐像台座には康安二年（一三六二）の銘がある。^{注34} 堂内には石像の薬師如来坐像（南北朝末期と推定）と脇侍の坐像のほか、多くの小さな石仏が祀られている。そして熊野神社から南に三百メートル程の国分幼稚園西の道端には、同じく南北朝末期のものと推定される日光・月光菩薩の石像二体がある。これらは西国分の薬師堂の薬師如来像と組み合わさり、薬師三尊像として一体であったと推測されている。^{注35} 『上野国郡村誌』の「村南」という位置から考えると、談義薬師跡は本来この辺りにあったのではないかと思われる。談義薬師跡と大蔵坊が近い位置にあることから、柳沢寺の談義所の活動に大蔵坊が関わっていたことは充分考えられる。

また、『国府村誌』によれば、享保四年（一七一九）に東国分の住屋源五兵衛が発心して「いえん坊」と号し、山子田柳沢寺の観音堂を私財を以て建立したとある。^{注36} 東国分は大蔵坊のある西国分や、妙見寺のある引間に隣接する大字である。「いえん坊」という名からは、大蔵坊近くの住人が修験山伏になり、柳沢寺と縁を結んだという経緯が想像できる。

花園妙見社の別当は、妙見寺（吉祥院）の他に本山派修験の宝常院と当山派修験の喜宝院が担当していた。この宝常院は大蔵坊の同行配下の坊であった。同じく大蔵坊配下に棟高（現・高崎市棟高町）の観学院観音寺があったが、この寺が管理した

観音堂には、昔この地に寺があり、千葉常将と船尾山衆徒との戦（または武田・上杉の戦乱）の折に焼失したという伝承がある。^{注37} これらのことから、船尾山縁起や花園妙見縁起の成立に、大蔵坊を中心とする本山派修験が関わっていた可能性が高いと考える。

以上、本稿では柳沢寺・花園妙見・滝沢寺の縁起について比較検討した。その結果、船尾山炎上の経緯をそれぞれの寺院が独自の解釈や脚色を加えて再興譚に組み込んでいること、そしてその改変の仕方には千葉氏の伝承に対するスタンスの違いが反映されていることがわかった。さらに、縁起内に秩父氏の妙見伝承も確認できることを指摘した。千葉氏の多様な伝承が上野国へ伝播した背景には、秩父と上野の本山派修験の活動が影響していたことが考えられる。そしてその中心になったのが、上野国府に中世から存在し、群馬郡中部の本山派修験をまとめていた大蔵坊だったのではないかと推測した。

注

- 1 有川美亀男「神道集」の説話と船尾山の縁起」（『国語と国文学』昭和三十二年三月）、『船尾記―翻刻と解説―二解説の部』（『群馬大学紀要 人文科学篇』第一四巻、昭和四十年六月）。松本隆信「中世における本地物の研究」（三）（『斯道文庫論集』一三輯、昭和五十一年七月）、のちに『中世における本地物の研究』二三 諏訪の本地・

- 上野国関係諸神の本地 (四) 桃井郷八ヶ権現の本地』
 (汲古書院、平成八年一月) に収録。近藤義雄「神道集と船尾山縁起」(『榛東村誌』榛東村、昭和六十三年六月)。大島由紀夫「説話と在地―沙石集・神道集など―」(『講座日本の伝承文学 第四卷 散文学』《説話》の世界) 三弥井書店、平成八年七月、のちに『中世庶民の文芸文化 縁起・説話・物語の演変』第一部 東国の縁起伝承世界 第一編 神道集と縁起伝承 八ヶ権現縁起の在地的展開 (三弥井書店、平成二十六年) に改稿収録。
- 2 福田晃「『神道集』と上州縁起群」(『神道大系月報』七二号、神道大系編纂会、昭和六十三年二月)。近藤義雄、前掲書。大島由紀夫、前掲書。榎本千賀「『神道集』巻八―四十七話―上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」と船尾山焼失譚」(『大妻女子大学紀要 文系』三八、平成十八年三月)。
- 3 渡辺麻里子「論議書『尊談』の意義―伝忠尋撰『七百科條鈔』との関係から―」(『印度學佛教學研究』第五三卷 第一号、平成十六年十二月)。
- 4 前掲、近藤義雄「神道集と船尾山縁起」。
- 5 前掲、近藤義雄「神道集と船尾山縁起」。
- 6 前掲、榎本千賀「『神道集』巻八―四十七話―上野群馬郡桃井郷上村内八箇権現事」と船尾山焼失譚」。
- 7 『神道大系 文学編一 神道集』(神道大系編纂会、昭和六十三年)。
- 8 前掲、近藤義雄「神道集と船尾山縁起」が関係資料として翻刻を載せている。
- 9 『妙見実録千集記』九五頁(千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書 三』千葉市立郷土博物館、平成六年)。
- 10 松田直弘・大山礼二「群馬県群馬郡 妙見寺誌」(あさを社、平成十六年)。
- 11 阿久津宗二「萩花園星神記解説―引間妙見社縁起―」(山田武麿・萩原進編『群馬県史料集 第八卷 縁起篇(一)』(群馬県文化事業振興会、昭和四十八年五月)、尾崎喜左雄「上野国神名帳の研究」三二九頁(尾崎先生著書刊行会、昭和四十九年)、『日本歴史地名大系一〇 群馬県の地名』三八三頁(昭和六十二年)を参照した。
- 12 『萩花園星神記』は前掲『群馬県史料集 第八卷 縁起篇(一)』に、『花園星神記』は前掲『群馬県群馬郡 妙見寺誌』に、『上毛花園星神記』は大島由紀夫「神道縁起物語(二)」(伝承文学資料集成第六輯、三弥井書店、平成十四年)に翻刻されている。
- 13 和田山の松本家は遠祖を和田義盛とする一族である(『群馬県姓氏家系大辞典』六三八頁、角川日本姓氏歴史人物大辞典一〇、角川書店、平成六年)。この松本兵衛門は文政の頃、染谷川故事歌碑を引間の妙見寺境内に建立する予定だったが、一部信徒に反対され、花園妙見寺をあきらめて千葉の妙見寺境内に建立したという(前掲『群馬県群馬郡 妙見寺誌』一八六頁)。

- 14 千葉市立郷土博物館編『紙本着色 千葉妙見大縁起絵巻』
 (千葉市立郷土博物館、平成七年)
- 15 千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書 一』五、
 資料編(二)『下総国千葉郷妙見寺大縁起』(千葉市郷
 土博物館、平成四年)
- 16 丸井敬司『千学集』をめぐる考察(千葉市立郷土博物
 館編『妙見信仰調査報告書 二』千葉市立郷土博物館、
 平成五年)。
- 17 福田豊彦・服部幸造全注釈『源平鬪諍録』坂東で生まれ
 た平家物語』下(講談社、平成十二年)。
- 18 前掲、丸井敬司『千学集』をめぐる考察。
- 19 高崎市冷水にある小祝神社の石祠には「妙見宮乳母神」
 と刻まれているが、宝暦四年(一七五四)のものである。
 千葉妙見の伝承を受けたものであろう。
- 20 樋口千代松・今村勝一共編『上野志料集成2 上毛伝説
 雑記 同拾遺』一七三頁(臨川書店、昭和四十八年。換
 乎堂、大正六年刊の復刻)。
- 21 『神道大系 神社編二五 上野・下野国』一九二頁(神道
 大系編纂会、平成四年)。本文の写真と解説が『妙見寺誌』
 に載る。
- 22 『箕郷町誌』四八一頁、一三九五頁(箕郷町教育委員会、
 昭和五十年)。
- 23 前掲『日本歴史地名大系一〇 群馬県の地名』「群馬郡箕
 郷町白川村」三六八頁。
- 24 榎本千賀『上野国群馬郡大嶽山縁記』と『神道集』関
 連の在地縁起資料(『西郊民俗』一九三号、西郊民俗談
 話会、平成十七年十二月)。
- 25 『上毛花園星神縁記』(前掲、大島由紀夫『神道縁起物語
 (二)』一一二頁)には「天平二年の秋より寛治七年迄、
 およそ三百六拾餘年の間、諸堂軒を連ね、莊嚴玉を磨け
 り」とある。
- 26 『船尾山柳沢寺所伝ノ縁起』には鎮守府将軍義家が常将
 の烏帽子親であったとある。
- 27 前掲『妙見信仰調査報告書 三』九五頁。
- 28 千葉市立郷土博物館特別展図録『妙見信仰と羽衣伝承』
 二二頁(千葉市立郷土博物館、平成十九年)。
- 29 大蔵坊については、『国府村誌』六〇八頁〜六一三頁(国
 府村誌編纂委員会、昭和四十三年)、『群馬町誌 通史編
 上 原始古代・中世・近世』二二八頁、三九七頁(群馬
 町誌刊行委員会、平成十三年)、『新編高崎市史 通史編
 二世』五三九〜五四九頁(高崎市史編さん委員会、
 平成十二年) 参照。
- 30 前掲、榎本千賀『上野国群馬郡大嶽山縁記』と『神道集』
 関連の在地縁起資料。
- 31 村上春樹『将門伝説』第二章 平将門伝説の伝播と展開
 四 修験者の伝播(汲古書院、平成十三年)。
- 32 『日本歴史地名大系一一 埼玉県の名』「山本坊跡」三
 四五頁(平凡社、平成五年)。

- 33 『上野国郡村誌 六 群馬郡 (三)』 一〇九頁 (群馬県文化事業振興会、昭和五十六年)。
- 34 前掲『国府村誌』六二六頁。『日本歴史地名大系 一〇 群馬県の地名』「西国分村」三八一頁には「康安三年」とあるが、康安は二年までしかない。
- 35 『群馬町誌 資料編 一 原始古代中世』七七二頁 (群馬町誌刊行委員会、平成十年)。
- 36 前掲『国府村誌』「柳沢寺観音堂」六一七頁。
『群馬町誌 通史編下 近代現代』一三五頁 (群馬町誌刊行委員会、平成十四年)。
- 37 (あおき・ゆうこ 二〇〇二年度博士後期課程
単位修得退学)